

2007年度 研究室便り

卒業生・修了生の皆様におかれましては、益々ご健勝のこととお慶び申し上げます。それでは早速、研究室の近況をご報告させていただきます。

まず、昨年同様、神寶秀夫先生（ドイツ中・近世史）、山内昭人先生（インタナショナル史）、岡崎敦先生（フランス中世史）の三名の先生方が教鞭をとられています。山内先生のご着任以来、三先生による指導体制は早五年目に入りました。また、昨年に続いて星乃治彦先生（ドイツ現代史）と、新たにイギリス近現代史がご専門の高田実先生（九州国際大学）にゼミを担当して頂いています。9月にはアメリカ史の大家である有賀夏紀先生（埼玉大学）による集中講義が行われました。そして06年度から新たに設けられた専門研究員となりました、わたくし中堀が筆を取らせて頂いています。

次に、学部生と院生をあわせて29名で、昨年より僅かに減りましたが、元気よく勉学に勤しんでいます。8月には四年生の杉崎愛さんが希望と不安を胸に交換留学生としてストラスブル第二（マルク・ブロック）大学に出発し、今度は三年生の岡本愛さんも同じくストラスブルに留学することが決まっています。学部生は、卒業論文を最終目標として、二・三年次の実習で基礎の手習いをし、三・四年次の卒論構想発表会（計3回）で個々のテーマでの実践に向かうという形が定着致しました。その成果の一端は本研究室のHPでご覧になることもできます。

修士課程には、向原宜臣君と新顔の大浜聖香子さんが入学し、岡崎先生のもとでフランス中世史を学んでいます。現在、イングランド・フランス中世史の安部恵里香さんは修士論文作成に向けて頑張っています。また、スイス帰りのドイツ・スイス中近世史の森崇浩君は、博士論文大成を目指して日々精進しているところで、岡部直樹君はロータリー財団奨学生としてブルガリアのソフィア大学に留学の予定です。さらに、本研究室OBで、毎週ゼミを担当して頂いている星乃先生が本学で二つ目の博士号を取得されるという悦ばしいニュースもお伝えしなければなりません。研究室学生の行事としては、一昨年再開された合宿をこの夏は由布院・別府で行い、研究室内の親睦を深めました。

本研究室主体の学会・研究会活動につきましては、10月と3月には九州西洋史学会大会、12月には九州史学会西洋史部会が例年通り開催されました。九州西洋史学会秋季大会では「歴史学方法論の現在——言語論的転回・社会構築主義・記憶——」と題してシンポジウムが催され、活発な議論が行われました。集中講義に有賀先生がいらした際には、先生を囲んで現代史セミナーが開催され、周辺から多くの参加者を集めました。また、ラテン語

読書会「タキトゥスの会」、近代国家研究会、西欧中世史料論研究会など、盛んな研究会活動が行われています。特に西欧中世史料論研究会では、「説教史料論」（06年3月）、「地中海研究史料論」（4月）、「王文書」（7月）のテーマを掲げて研究会が催され、さらには年末、九州史学会との共催で、一日目の全体でのシンポジウムで「記憶の管理と文書の伝来」と題して、二日目の西洋史部会午前の部の小シンポジウムで「中世社会経済史研究と史料論」と題して二つのシンポジウムが行われ、全国から専門研究者を糾合しつつ盛んな議論・交流が行われました。このように本研究室は、九州における西洋史学研究ならびに国際的学術交流の拠点として、周辺の大学や研究教育機関と連携しつつ、研究教育・社会活動を変わず推進しています。

研究室の様々な活動や最新のニュースにつきましては、下記アドレスの本研究室 HP も是非ご覧になって下さい。末筆ながら、皆様のご健勝ならびにより一層のご発展を心よりお祈り申し上げます。

(中堀博司)

会員近著紹介

- ・古賀秀男『キャロライン王妃事件——「虐げられたイギリス王妃」の生涯をとらえ直す——』人文書院、2006年。
- ・星乃治彦『男たちの帝国——ヴィルヘルム2世からナチスへ——』岩波書店、2006年。
- ・小山啓子『フランス・ルネサンス王政と都市社会——リヨンを中心として——』九州大学出版会、2006年。